



言語力育成の観点から —英語科・国語科の教科横断 メタ文法能力指導の試み—

秋田喜代美

(教育心理学コース・教育学研究科)

本報告は、言語教育プロジェクト

◆ 教育学研究科

秋田喜代美(教育心理学コース)

斎藤兆史(教育内容コース)

藤江康彦(教職開発コース)

藤森千尋(教育学研究員)

濱田秀行(群馬大学)

柁木貴之(総合文化研究科)

王 林鋒(教職開発個コース)

三瓶ゆき(教職開発コース)

◆ 東大附属中等教育学校

授業者 越智豊・田宮裕子

英語科・国語科教員 全員

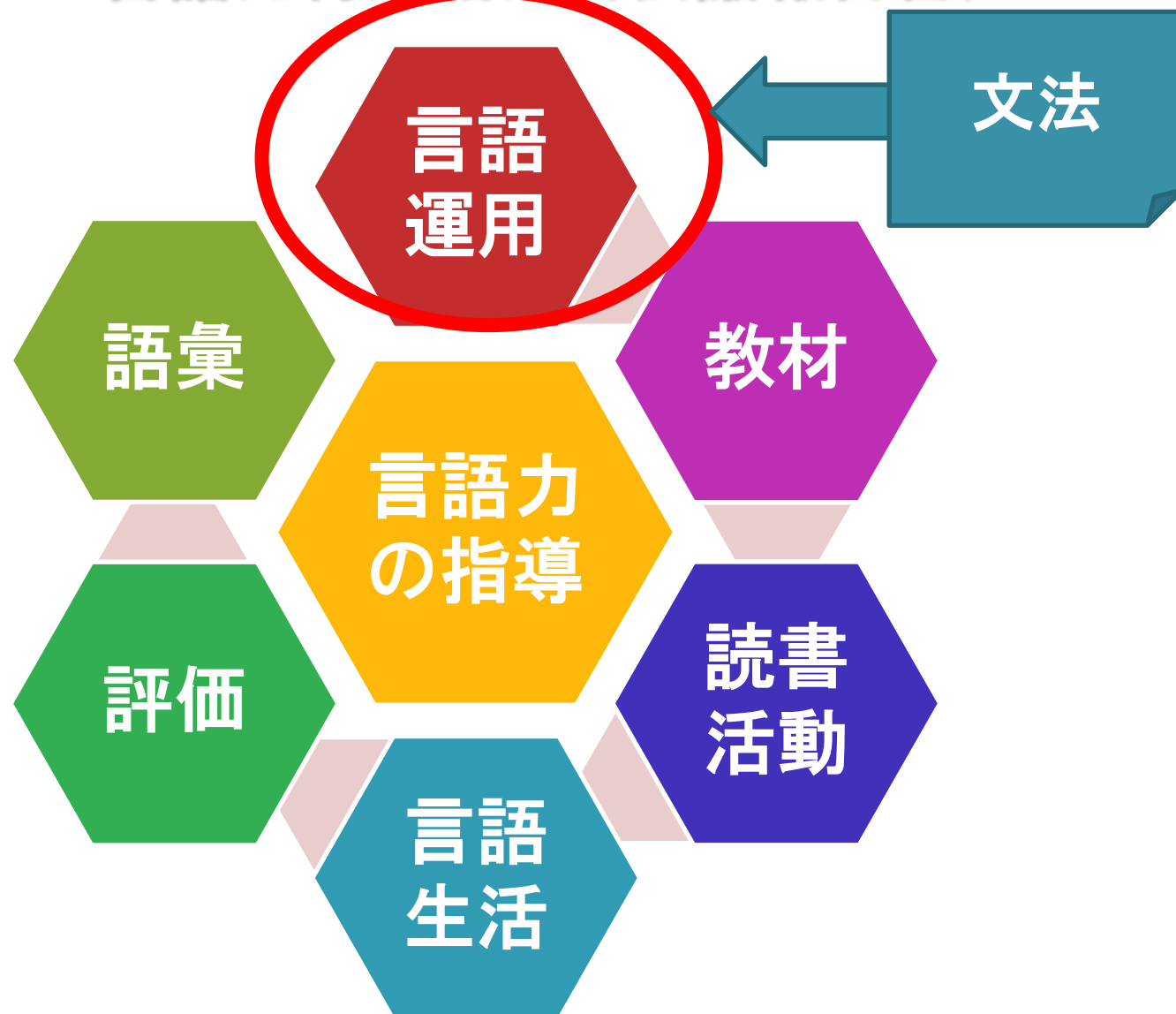
による共同研究として実施された

研究の一部を報告するものである。

協力いただいた先生方と生徒の皆さんに感謝申し上げます。

言語力育成への総合的指導

(H 1 9 言語力育成協力者会議報告書)



問題 1 中等教育の文法指導

- 言語力の育成は、①すべての教科で、②教科横断、③発達に応じた指導が求められる。
(中等教育段階での言語教育の検討)

「言語運用法について

文や文章の構造と機能についての理解と自覚を深め、効果的な言語運用を可能にする力を育成することが望まれる。文法についても、国語（言語）の特質の理解を進めるとともに表現や対話に役立つ実用的・実践的なものとなるよう見直していく必要がある。」

(H 1 9 言語力育成協力者会議報告書)

文法指導の現状

◆ 国語

文法 暗記による学習と生徒は認知。
形による指導と捉えられることが多い
(山室、2011)

◆ 英語

学習でつまづきやすいポイント
第1位 文法 約8割
文法事項が理解できない 45.7%
(「ベネッセ中学校英語教育に関する基本調査」
2009)

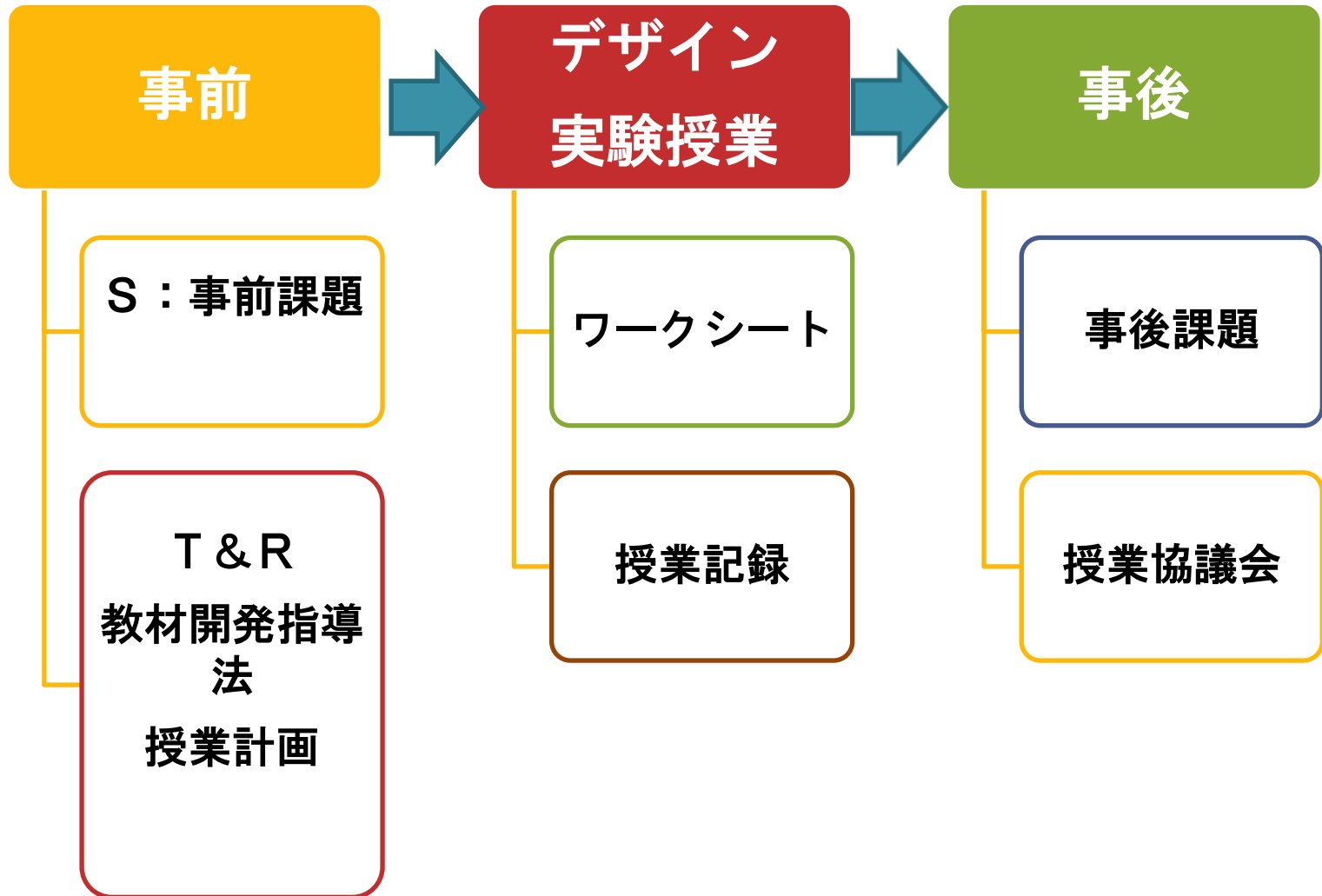
◆ 文法指導の方法としての協同学習導入の試み等は報告されている(高木、2009)。

問題2 メタ文法能力とは

- 言語に関して「文法」を意識化して、自分で考えたり説明できる能力
- 母語を起点とし、新たな外国語習得において個々の言語の規則を超えたところにある、言語の法則を理解する「メタ文法能力」を想定。メタ文法能力の育成が各言語の運用能力育成につながると予想。
- 教科(言語) 横断的に文法の共通性や差異の理解を通じた文法能力育成
教材、指導法、授業、カリキュラム

方法 1 デザイン実験授業

中等教育学校 5 年 3 クラス



方法2 メタ文法授業の課題と指導

- ◆ 課題：日・英、漢文・英文の比較検討
語順、修飾関係に関する課題を取り上げる
- ◆ 既習事項とのつながりを考慮した課題設定
- ◆ 指導法：小グループでの協働学習を通して相互の意見を交流しながら発見
- ◆ 文法体系や文化的知識など、内容から言語学習の世界へのつながり、奥行が見える

方法3 学習課題

- 英語科

1) 「私は、黒い目のきれいな女の子に会った」
の英訳

2) 自分たちのオリジナルインスタント・ラーメン表現「宇宙で食べるスープの濃いトマト風味のインスタントラーメン」

- 国語科

1) 「All of these...not」 「Not all of these...」

2) 「家貧、常不得油」 「家貧、不常得油」

- その後さらにそれをうけて英語科で部分否定、全否定の授業をその後に実施

文法スペシャル 文法解説

1 「S V O」の並べ方「6通り」

日本語・韓国語はSOV型、英語や中国語はSVO型、
他組み合わせ(VSO型、VOS型、OSV型、OVS型)少数

2 「『主語、述語、目的語』という語順が漢文と英語では同じ」以前の授業の復習 「英語と漢文がっていうよりは、同じSVO型の言語だからってことなんです」。

3 SVO型での語順以外の共通点:助動詞の位置

- 食べない 食べよう can swim will swim
- SOV型言語:助動詞は動詞の後に来る場合が多い。
- SVO型の言語では助動詞は動詞の前に来る場合が多い。

漢文の「可(べし)」や「不(ず)」も動詞がその後に続く点でSVO型の特徴を有している、SVO型の言語には前置詞かそれに類するものがある
「文型」への自覚を高める

方法4 事前・事後課題

文法学習への認
識と
行動調査

- 文法学習観
- 学習方略

文法課題

- 国語
- 英語

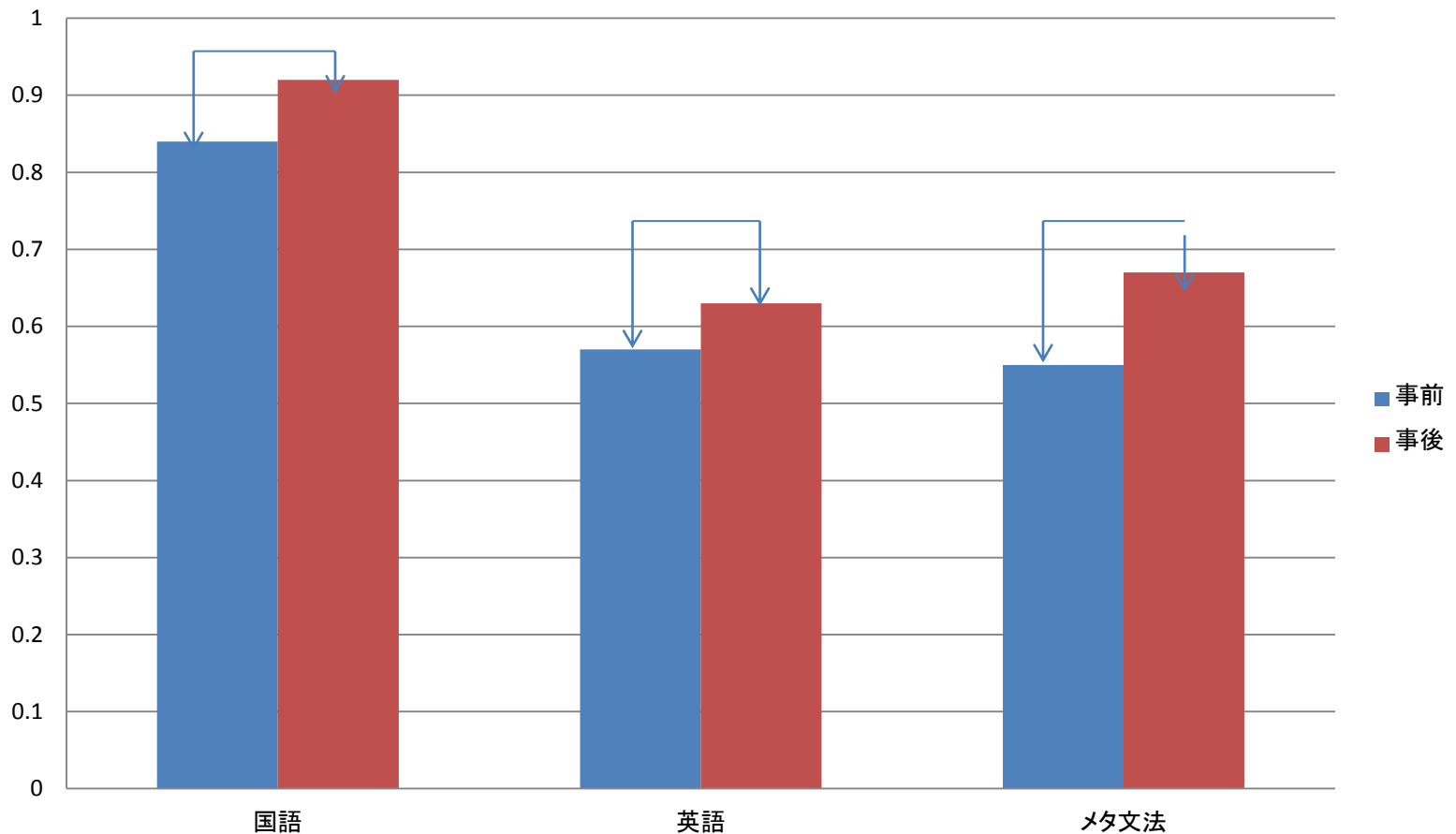
メタ文法課題

- 国語・英語混合

結果Ⅰ-Ⅰ 生徒 事前・事後比較

いずれの課題でも
有意な伸びがみら
れる

事前事後課題の正答率



I-2項目の下位分析から

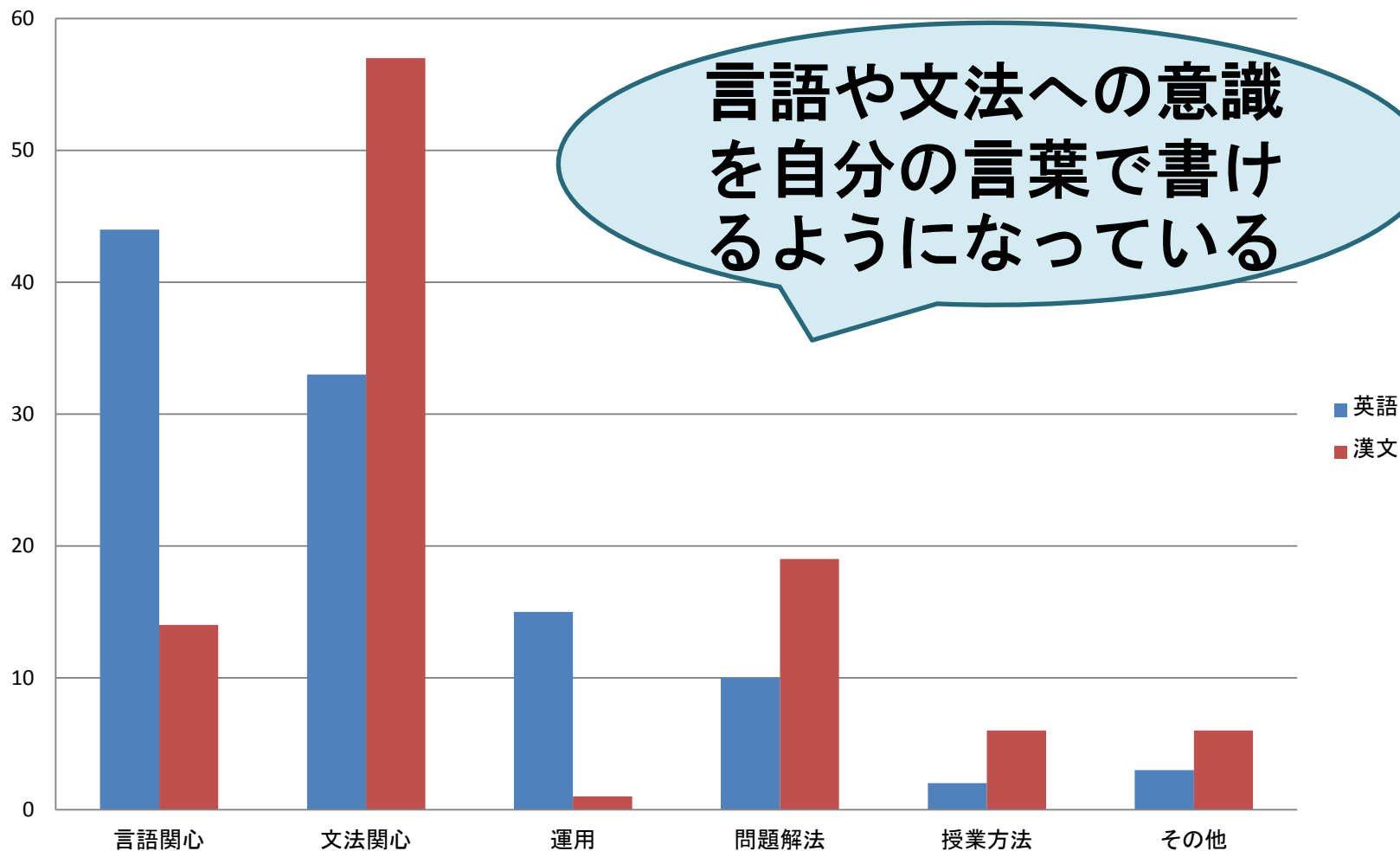
- 1 国語 単語レベル問題で正答数向上
(節レベル問題は変化無)。
- 2 英語 文中の語機能や係り受け課題で
「全く分からない」の生徒数減少。
(英単語の品詞形態課題等では変化がない。)
- 3 メタ文法 語句レベルで正答数増加。
「全く分からない」の人数が減少。

以上より、

各教科 1 時間つつ 2 時間でも、授業の効果は直後の遂行や意識においてはみられた。指導内容と直接関連した内容で効果がある。ただし限定的。

結果2-1 授業の振り返りの分析

授業感想記述内容別人数



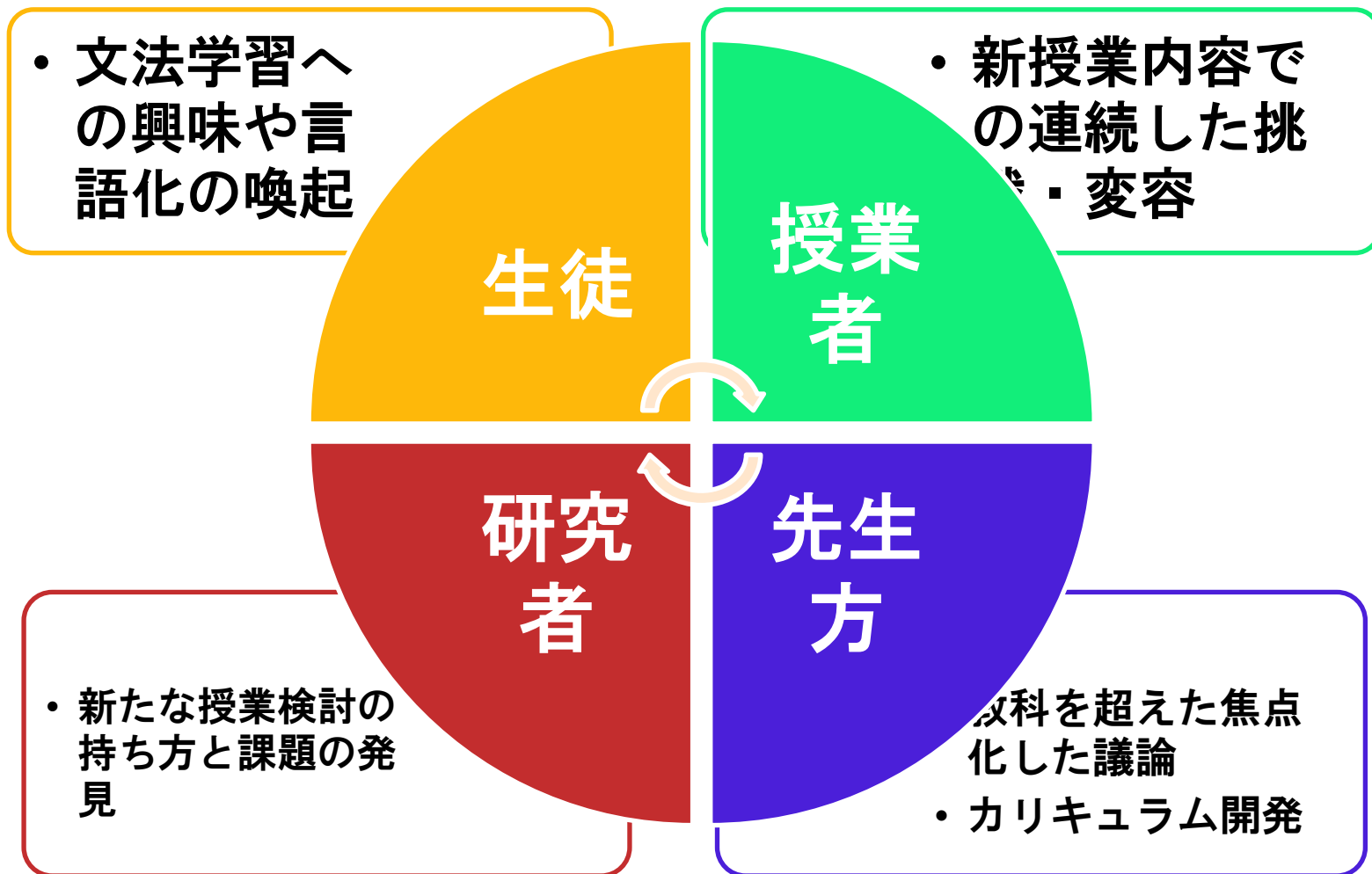
結果 3 3回の授業記録分析

- 生徒：「文法(形式的側面)」と「解釈(意味的側面)」をつなげ、自分たちで言葉の産出を通して言語体系による差異を説明している。
- 授業者：課題数、課題提示の方法や授業展開、板書の法などを3回の授業各々において、毎回工夫変化させながら検討していく。その中で安定的な課題のありようが探求されていく。

結果 4 教科横断授業研究協議会

- 1) 日常化の問題：カリキュラム、
授業内一部での導入の可能性
- 2) 適時性：両教科のカリキュラムの
どこで指導するのが良いか
- 3) 教材研究：内容のリアリティ
- 4) 文法学習と英文和訳、和文英訳の
関係：プラス面とマイナス面、
文レベル、テキストレベル
- 5) 文法用語の働き:補助線として

学校を基盤とし教科横断の協働的 カリキュラム開発



全体考察と課題

1. 生徒自身への短期的な文法への意欲や理解促進は今回の実践では示された。
2. 授業を英語科・国語科で共有・実施・検討した意義(授業時数が限られてい
る中での教師相互間での経験の共有):指
導法、生徒の学習過程をめざした授業協
議だけではなく、指導内容を授業の事実
から考え、言葉の教育の可能性を検討す
ることの意味
- 3 今後複数回を重ねる中で、内容、学
年、豆知識のみではないメタ文法能力指
導のあり方のさらなる検討